陽だまり

篁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
陽だまり

【Ｎコード】
Ｎ６５７２Ｋ

【作者名】
篁

【あらすじ】
うっすらと記憶している彼女は誰？
両親から自分の過去を知らされた僕は・・・

（前書き）

拙著『綺麗な嘘』発売中です。
ご一読いただけましたら、幸いです。
＊＊＊

混濁(こんだく)していく意識の中で、僕は彼女の存在を確信する。
誰だろう？
この暖かい感触は、なんとなく覚えているような・・・。

◇

気がつけば、図書室の端のテーブルに僕は突っ伏して眠っていたようだ。
先ほどまで眺めていた写真集の表紙をしげしげと眺める。
『陽だまりの向こう』
ページを捲っていく。
路面に立ち並ぶ満開の花を咲かせた桜。
一面の菜の花畑に差し込む暖かそうな陽射し。
もう一度眺めても、先ほどまで感じていた彼女の存在を、その香りを、思い出すことが出来ない。
誰だろう？
いつも一緒に通学しているお隣さんの初美(はつみ)さんだろうか？
初美さんは一年先輩で、小学生の時からよく僕の面倒を見てくれた。
年齢は一つしか違わないのに、僕からは随分大人びて見え、少し憧れを抱くようになった。
そんな自分の感情を、僕は戸惑いながら、持て余す。
携帯電話で時刻を確認する。
午後四時半を回っている。
「帰らなきゃ」
誰もいない図書室に、僕の呟きが予想以上に響く。
今日は僕の誕生日。

きっと今晩の夕食は母さんが思いっきり豪華な料理を作ってくれるはず。
今日で僕は十三歳になる。
中学の入学式を思い出す。
今年小学四年生になった弟を中央に家族で集合写真を撮った。
中学生にもなって、家族で写真を撮るなんて、少し恥ずかしかった。
現像された写真に写っている僕は、少しはにかみ、視線をカメラからほんの少しずらしていた。

◇

予想通り、母さんは豪勢な夕飯をつくってくれていた。
パイ生地がキノコのように、カップの縁から膨らんでいるオニオンスープ。
それに僕の大好きな、大きなコロッケに、鶏の唐揚げ。
色とりどりのパプリカを使ったサラダ。
最後には、母さん自慢の手作りケーキ。
父さんの帰宅を待って、僕たちは夕食を始める。
目を細めて僕と弟の和志(かずし)を見る父さん。
普段通りに優しい微笑みを浮かべている母さん。
僕と和志は、お腹がいっぱいになった。
ケーキを食べる前には、和志が僕の誕生日を歌って祝ってくれた。
満腹感と充実感。
「ごちそうさま」
そう言った僕と和志は宿題をするために二人で使っている僕たちの部屋に戻ろうとする。
「忠志(ただし)、ちょっと待ちなさい」
父さんが僕を呼び止める。
和志は、「先に行くよ」と言い、階段を登っていった。

◇

「なに？」
母さんが父さんと僕にに珈琲を淹れてくれた。
珈琲は熱くて苦くて、ちょっと苦手。
母さんは父さんの隣に腰を下ろし、ちょうど僕の真正面に二人が座る格好になる。
「忠志」
父さんが、母さんの方をちらりと見てから、僕に呼びかける。
「うん？」
「誕生日おめでとう」
「ありがとう」
母さんの優しい微笑みがいつもより寂しげに見えるのは何故だろう？
「今日でお前も十三歳だ。立派に育ってくれたと思う」
父さんは、どうしたのだろう？
照れてしまうじゃないか・・・。
「実はな・・・」
父さんが話し始めたとき、母さんが口を挟んだ。
「私から言います」
「しかし」
「いいの」
そう父さんに言った母さんは、僕をじっと見つめる。
「忠志は、お母さんの子供じゃないの」
「えっ・・・」
僕は絶句する。
そんな訳無いじゃないか。
だって、ずっと一緒に暮らしてきたじゃないか・・・。
「お前が二歳になって間もなく、お前の本当のお母さんは事故で亡

くなった」
ゆっくりと父さんが言う。
「その後、母さんと結婚し、和志が産まれた」
普段は柔和な表情を見せる父さんの顔が強張っている。
母さんも、僕を寂しげな微笑みでじっと見つめる。
「本当のこと、ずっと黙っておこうかとも思ったの」
母さんが言う。
そうだよ。そんなこと知りたくなかったよ。
言葉にならない思いが僕の視界を黒く染めていく。
「でも、ちゃんと話そうと思ったの」
母さんは続ける。
「忠志ならちゃんと受け止めてくれるって。私があなたのことを愛してるってことを分かってくれると思ったの」
「本当の事を話したのは、本当にお前のことを息子として一緒に生きていきたいと、母さんが決心したからだ」
父さんは言い終えると、珈琲に口を付けた。
急に不安になる。
「僕・・・、ここにいてもいいの？」
不安がそのまま口をついて出てくる。
「当たり前でしょ」
母さんが、言い切る。
「今までと同じだ」
父さんも言う。

◇

宿題も手に付かず、シャワーを浴びる気も起きなかった僕は、二段ベットの上で寝転がる。
「兄貴、どうしたの？」
下から和志の声がする。

「なんでもないよ」
腹違いの弟。
でも、僕にとって大切で、ずっと一緒にいたい宝物。

◇

和志が寝息を立てている。
それでも僕は眠れない。
ふと図書館で見た、菜の花畑の写真を思い出す。
暖かく柔らかい手が僕の手を握っている。
誰？
僕は誰かと散歩してるの？
あぁ、もしかして、この香りは、本当の母さんの香り？
あの時、確信した女性の存在は、僕の本当の母さんだったんだ。
断片化し、薄れてしまった記憶。
でも、あの暖かさを僕はずっと胸にしまい込んでいたんだ。
居心地の良い、その暖かさを感じているうちに、僕はやがて眠りにつく。

◇

翌日は土曜日だった。
「父さん、本当の母さんのお墓はどこにあるの？」
「忠志、もうお前はそんなことを考える必要はないんだ」
読んでいた新聞を折り、僕に目を向けた父さんはそう言った。
父さんも眠れなかったのだろうか、目の下には隈ができている。
「僕はもう大丈夫。僕は父さんと母さんの子供だよ」

◇

車窓から見える景色は、風に流されていく雨粒のせいで滲んで見える。
電車を乗り継ぐこと、二回。
家を出てからもう三時間は経過している。
こんなに遠くまで、一人で旅をしたのは初めてだ。
タクシーに乗り、目的の霊園の名前を告げる。
花もなにも持たず、僕は本当の母親の墓石の前に立ちつくす。
傘が風にはためく。
僕は傘を手放した。傘は、回転しながら遠くへ転がっていった。
前髪から雨粒がしたたり、目に入る。
「母さん」
僕は小さな声で呟く。
「忘れてしまっていてごめん」
気がつけば、涙が頬を伝っている。
涙が止まるまで、僕はじっと歯を食いしばり、墓石を見つめる。
「父さん、そして今の母さんの元でこれからも頑張って生きるよ。大人になったら、また会いに来るからね」
そう言って、僕は踵(きびす)を返す。
雨が小降りになり、徐々に陽が差し始める。
少し、心が温まってくるような気がした。
昔、母さんと散歩したのは、こんな陽射しの下だったんだ、そう思い、僕は待っている家族の元に帰り始めた。

（後書き）

読んでいただき、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6572k/

陽だまり

2010年10月18日00時20分発行